

アメリカ黒人文学からインド文学への道 — ロヒントン・ミストリーの *A Fine Balance* にも触れながら —

加 藤 恒 彦

私が立命館大学・産業社会学部英語教員として赴任して以来今年度で30年を迎え65歳となり定年退職することになりました。この立命館大学での30年間は私の研究者、教育者としての最も重要な時期であり、また本学のこの間の発展や変化との関わりも私の人生にとっての貴重な財産となってきました。しかし大学とのかかわりという問題については別の機会も与えられておりますので、ここではもっぱらこの間の私の研究者としての側面に光をあて振り返らせていただきたいと思います。

「黒人研究会」は何故、どのような状況のもとで創設されたのか

私の研究者としての歩みは「黒人研究会」の歴史と切り話して考えることはできません。そこでまず、「黒人研究会」というものの成り立ちについて説明させていただきます。

「黒人研究会」は、1954年に故貫名美隆先生の呼びかけで神戸市外国語大学に設立されました。アメリカの黒人の15年間にわたる自由と平等のための公民権運動が幕を開けるのは翌年の1955年ですから「黒人研究会」はその前年に創設されているのです。公民権運動の発展は創立後の会の活動の大きな励ましとなったことは明らかですが、公民権運動の始まりや発展に刺激されて発足したのではないという点が重要です。では「黒人研究会」の発足を促したのはどのような事情によるものだったのでしょうか？「黒人研究会のこと」という貫名先生が『現代と思想』に1976年に書かれたエッセイ¹⁾を読むと、実は戦前の時代からすでに日本においてもアメリカ黒人の問題や文学についての一定の蓄積があり、それを受け継いだ人々が、戦後生まれた新たな日本の政治的・文化的状況が生み出した課題に答えようとして始まった、ということができるといえるでしょう。つまり、動機は日本の中にあっただともいえるのです。その点をもう少し詳しく見て行きます。

戦前の日本は明治以来の近代化の延長線上で台湾・韓国を植民地化し、1931年の満州事変を

切掛けに中国支配に乗り出し、中国の市場開放を唱えていたアメリカとの対立を引き起こしました。そして国内では軍国主義とそれをささえる大政翼賛会政治が確立されて行きました。そうしたなかで戦前・戦中の日本人のなかにはアジアの人々への蔑視の意識が植え付けられ、また体制への異議申し立ては「赤」と呼ばれ治安維持法のもとで徹底的に抑圧されてきました。

15年間にわたる中国を巡る日米の闘いの後に敗戦を迎え、アメリカの施政下に置かれた日本は、それまでとは180度反対のアメリカ民主主義体制へと転換されます。この時期の日本を研究したJohn W. Dowerの*Embracing Defeat*²⁾を読むと戦中、軍国主義のもとで息苦しさを感ぜながらも何も云えなかった日本人がいかに新しい民主主義に解放感を感じ、それを取り入れ、同時にそれまでいばっていた軍人への批判を始め戦前の日本の体制に批判的な意識を持ち始めつつ新しい民主的な日本文化の創造をめざしていたのかがわかります。そうした流れの一端を担っていたのが「日本民主主義文化連盟」運動です。³⁾戦争中に戦争に反対し、日本の植民地主義を批判したために獄中にいたか、沈黙をよぎなくされていた知識人・文化人が敗戦直後から「大衆の文化運動に参加」する形で生まれたもので「終戦後わずか6カ月で地方組織を統一する形で作られたのです。「黒人研究会」の発足にはこの文連との連携があったことを貫名先生も強調しておられます。「黒人研究会」が大学の先生だけの研究会ではなく、学生や一般市民にも開かれた非権威主義的で民主的な組織として活動して行くことができたのもそのような原点が関係していたかも知れません。

しかし、戦後のアメリカによる民主化の動きにはもう一つの重要な展開がありました。それは冷戦体制が始まり、自由主義体制の一方の大元締めとなったアメリカのアジアにおける防共体制の重要な一翼を日本が担わされることになり、アメリカ・世銀による経済援助も受けながら日本の資本主義の再建が図られ、他方、アメリカで起きたのと同様に日本でも「赤狩り」が行われ、容共勢力の公職追放が行われ、そのもとでの軍隊の再建の動きがありました。こうしてサンフランシスコ平和条約締結直後からアメリカ主導の戦争へと日本が巻き込まれるのではないか、という危機感が生れていたのです。

そのような政治状況の下で問題になったのは、アメリカという国をどう見るのか、ということです。敗戦直後の米軍の支配化の日本では「せきをきったようにヨコ文字やカタカナが街頭にあふれ、なんでもかんでも「アメリカ」とか「民主主義」という枕ことばがつけられ」という意味での「アメリカ化」も急速に進行し、かつ「アメリカ化即民主化」であるという風潮があったことも貫名先生は指摘しておられます。

貫名先生のそのような言葉のはしばしにはそのような「アメリカ化」への苦々しい思いを感じるのですが、その背景には戦前の時代からの黒人を軽蔑し支配してきたアメリカという国への批判的意識があったのではと思います。貫名先生は、戦前の日本のアメリカ研究について、「戦前の早い時期に『水平社新聞』の木村京太郎氏によるアメリカ黒人史や高垣松雄氏による「ア

アメリカ文学の背景としての黒人問題と奴隷のことを『英語青年』に掲載されたのを読んだことがあった」と書かれています。そして会の創立にもかかわられた赤松先生によると、創立時に貫名先生が強調されたのが、「アメリカ黒人の問題は畢竟アメリカ民主主義の核心に触れる」ということと、「ニグロ民族の歩みをアメリカのみならずアフリカ、L.A.をも包括した世界的な視点から位置づける」ことだったと書いておられます。

では、その当時の日本の研究者の間の黒人に対する意識はどうだったのでしょうか？貫名先生はこの点について「黒人問題について・・・ほとんどまったくの無関心かからかい半分ではいけない人があまりにも多かった」と書いておられます。そして「19世紀以来白人植民主義者が世界に宣伝してきた有色人種なかでも黒人に対する劣等視が、学識ある日本人に奇妙な形で根深く残っている」と指摘され、そのような人々は「ニグロに文学なんてあるのか」という質問を研究会の会員に投げかけるということがよくあったと述べておられます。

「黒人研究会」は、このように冷戦体制が始まり、日本の将来に大きな影響力をもつにいたったアメリカに主導された戦争の危機を多くの人を感じるなかで、アメリカをどう見るのかが日本の平和と民主主義にとって大きな問題になり、かつ庶民の間にはアメリカ民主主義礼賛ムードが強まり、他方、学識者の間でさえ黒人への無理解が一般的である時代に、アメリカ民主主義は黒人を差別している限り本物では無く、かつ我々は黒人の問題を世界史的視点から見る必要があるという視点を持って発足したのです。つまり最初から黒人問題や黒人文学の研究は社会の大きな問題との関連のなかで位置付けられ、意義を与えられていたのです。

私の学生時代

さて私は会の創立から13年後の1967年に神戸外大の英米学科に入学します。それはアメリカによるベトナム戦争が激しさをます状況と大学のなかでは授業料値上げ反対や大学の民主化の運動が始まるという時代でした。私はそうした問題の大切さは理解できましたが、そうしたことについて何も知らず、いわば白紙の状態でそのなかに飛び込んだのです。

大学に入学するとき私は二つの目的を持っていました。一つはこの世界の仕組みとそれを変えるにはどうすればいいのかという問題意識です。第二は、中学時代から文学に深く惹かれていたので、その研究で将来生きて行きたいということでした。第一の目標との関係で、色々な社会科学系の本を読み始めましたが、その結果、マルクスを自分の頭で理解しないと始まらないという結論に達しました。そこで彼の最大の学問的成果である『資本論』を読む決意を固め、一年生の秋をそれに当てました。しかし、二回生になって自治会の委員長になってしまった私は、少なくとも日本の現代史を知らずして責任ある方針を打ち出せないこと、そして資本論を読むだけではそれはわからないことに気づき、戦前から戦後にかけての日本の歴史を勉強し始

めました。第二の目標では英文学の原書を片端から読みあさりしました。そしてこの二つの面での読書経験と学生運動の経験から文学を社会的な視点から読み解く必要を強く感じました。しかし、当時の英文学会の主要な傾向はアメリカの学界の影響を強く受け、文学研究を社会との関係から切り離し言葉の分析に絞るニュー・クリティシズムの理論に支配されていました。従って、私はそれに強く反発しました。私は、文学研究は、広い意味での社会変革の一翼に位置づけられるという考えを持っていたからです。

他方、黒人文学との出会いは、一回生の英語の時間でアメリカ黒人文学の作家 Richard Wright の短編を読んだことに遡ります。小西友七という有名な言語学の先生の授業でしたが、この人は同時に黒人研究会の創立メンバーの一人でもあったのです。読んだのは“*The Man Who Went to Chicago*”という短編ですが、南部での人種差別の体験の後、北部に向かった黒人青年のシカゴでの人種差別の体験を描いたものです。それを読んだときの衝撃は40年近くたった今でも覚えています。それが黒人文学が存在するということを知った最初の経験であり、それ以後、黒人文学についての本を読み、自分で作品を買い、読み進めて行きました。しかし、最初から黒人文学にのめりこんだわけではありません。英米学科の学生としてシェークスピアを始め、イギリス文学の主要な作家や作品を原書で読み、やがて二回生あたりからアメリカ文学へと関心を行きました。何故ならアメリカ文学の方が現代の世界を描いていてより自分の問題意識に近かったからです。そしてやがて Theodore Dreiser の作品に遭遇し彼の傑作 *An American Tragedy* を卒業論文のテーマにすることに決めます。ドイツ移民の子として中西部に生まれ、貧富の差が激しいアメリカのなかで物質的成功の夢に取りつかれ、挫折し電気椅子の上で死んでゆく青年の物語です。当時のアメリカ人が捉われていたアメリカの神話、すなわち人間の幸せが物質的な富の獲得にあり、その実現がアメリカでは可能であるというイデオロギーをアメリカの現実ぶつけ、それが碎けるさまを描いたものです。私のドライサー研究は大阪市立大学の大学院時代にまで継続し、修士論文のテーマもドライサーでした。

だがその間も Richard Wright, Ralf Ellison, James Baldwin, Langston Hughes 等の作品を折に触れて読み続けていました。私がライフ・ワークとして黒人文学に取り組もうと決めたのは高知女子大学への就職が決まって二年目の1975年ごろのことでした。つまり最初の出会ってから8年後のことだったのです。それは何故か？私のなかでの答えは明らかでした。黒人文学を考えるとということはその背景にあるアメリカ黒人の重い現実を私の肩に背負い込み続けることを意味したからです。そういう気持ちなしに黒人文学を論じることなどできないと思っていたのです。それが「しんどくて」できなかったのです。その意味で8年という時間は私のなかの人間としての変化と不可分でした。それは単なる知的な成長だけではなく、社会や自分の大学・職場で今起きている問題との関わりを通じた人間としての成長とかかわっていました。端的にいますとそれは学部時代の自治会委員長としての活動や全共闘による大学封鎖との闘

い、大学院時代の文学部院協の委員長としての関わり、高知女子大学での組合委員長としての仕事、地域の文化運動との関わり等を通じ、自分のなかの個人主義者としての狭い枠をより広げ、専門性を通じ社会的役割を果たしうる人間に変わる必要があったのです。そうした内面のいわば格闘は、黒人文学の理解を深め、かつ黒人文学との格闘は、自分の現実とのかかわりを支えてくれたのです。

私の「黒人研究会」とのかかわりに戻しますと、その最初は1974年の20回大会に遡ります。神戸の六甲荘で開かれた大会にはゼミの指導教官でもあった故貫名先生を含め、当時の日本の黒人研究を代表する人々が一堂に会しておられました。その当時私は、高知女子大学に赴任したばかりでもあり毎年の全国大会に顔を出し、時に発表させていただくぐらいでした。私が毎月の例会にほぼ欠かすことなく参加し始めたのは1982年の立命館大学への赴任以来のことです。その意味でも立命館大学への赴任は私の研究者としての発展にとってラッキーなことだったのです。

日本の黒人研究の歴史的段階

第一期

私が「会」に本格的に参加し始めた1980年代の初頭の時期は、戦後の創立時からの時期を第一期とおけば、日本のアメリカ黒人文学研究の第二期に相当すると考えています。第一期の1970年代までは先にあげたWright, Ellison, Baldwin, Hughes等が、アメリカや日本の学界での評価とは別に、黒人文学に関心を持つ人々の間では、メジャーな作家とされていました。彼らは、世代的に言えば公民権運動以前の時代の体験をもとに主要な作品を生み出していた作家たちです。そしてWrightとEllisonは、その晩年には人種主義のアメリカが変わることに絶望し、パリに避難所を見出していました。公民権運動が始まる直前のことです。NAACPを20世紀の初頭に設立し生涯を人種主義の壁を打ち壊すための文化的・政治的闘いに捧げた黒人知識人W.E.B. Du Boisにしてもしかり。彼の場合にはそれはアフリカのガーナでした。こうした黒人文学者や知識人の晩年の選択は人種の壁が彼らの世代にとっていかに高くそびえていたのかを示しています。ライトは、当時すでに「全米作家会議」でもその力を認められていた作家であったのですが、1935年にニューヨークで行われた第一回「全米作家会議」の終了後、ミッドタウンでホテルを探すのですが、黒人の彼を泊めてくれるところなどどこにもなかったのです。1935年にここにも見られるのは黒人文学の最大のテーマである黒人のインビジビリティ (invisibility) の問題です。つまり白人は黒人の皮膚の色という外見だけを見、当時すでに高名な作家であったライトを黒人としてしか見なかったのです。キング牧師が公民権運動の昂揚期にワシントンで行ったあの演説の一節で「私は黒人がその性格 (つまり中身・値打ち) によ

て判断される時代がいつかやってくるという夢を持っている」と言ったのはこのことを指しているのです。

しかし彼らが人種主義的アメリカの変革に絶望しアメリカを離れたその時期は、皮肉にも人種主義のアメリカが大きな変化に向けての一步を踏み出し始めた時代だったのです。

公民権運動の時代がもたらしたもの

ではこの15年間にどのようなことが起きたのでしょうか。1955年に始まったアラバマ州モンゴメリーでの市営バスにおける人種隔離制度の撤廃を要求したボスボイコット運動が勝利したことを切掛けに、公民権運動が燎原の火のように南部全域に広がり、白人の運動への支持や参加も得て高揚し、1964年には公民権法がアメリカ議会を通過し、翌1965年には投票権法も通過します。しかし、公民権法の成立はある意味でそれまでの法的平等を求める闘いの限界をも露呈してくることとなります。

「法的平等」そのものは、進学や雇用における白人との競争における差別のない自由な競争を意味します。しかし自由な競争は、奴隷制以来の差別と抑圧の蓄積によって学力や職歴において相対的に後れをとっていた黒人の中産階級にとって「結果における平等」をかならずしも保証するものではありませんでした。

また、公民権法は、1960年代に入り深刻さを増していたゲッターの黒人の若者の失業率の高さ、それによって生じる経済的不平等を解決するものでもありませんでした。1965年以来毎夏に都会のゲッターで起こった人種暴動は公民権運動の展開にもかかわらず何も変わらないゲッターの現実や人種差別への怒りと焦燥の表れであり、それを政治的に表現したのがブラック・パワーを叫ぶブラック・ナショナリズムの新たな諸潮流であり、新たな黒人の美学を求めるブラック・アーツ運動へと展開します。

こうしたなかで1960年代の末には支配層も「法的平等」の実現だけでは黒人の高まる怒りを抑えられないと判断し、白人と黒人との「結果における平等」を実現する手段としてアフーマティブ・アクションを超党派で実施する一方、過激化した黒人解放運動を警察権力の行使によって鎮圧します。こうして1970年代はアフーマティブ・アクションのもとで黒人の中産階級が次第にアメリカの主流の社会に受け入れられて行くこととなります。

黒人の運動はそのような15年の歳月のなかで年代や性を問わず、アメリカ黒人を巻き込み、運動のなかで世の中が大きく変わる時代を体験させました。そして男性との平等を求める白人の女性のフェミニズム運動や他のマイナリティ集団への差別の撤廃への動きをも励まします。そしてこのアメリカでの運動はイギリスでの移民の差別反対運動やフェミニズムの運動、カナダやオーストラリアでの先住民やアジア系への差別撤廃への動きにも大きなインパクトを与

え、さらには南アでのアパルトヘイト反対の国際的運動にもつながってゆきます。

こうしてアメリカの1970年代は1960年代が切り開いた新たな地平に立ち、その歴史的成果を刈り取る時代になって行きます。それは公教育機関や高等教育機関における黒人やマイノリティへの理解を深める歴史教育や大学におけるブラック・スタディーズの導入への議論が進み、黒人文学にも新たな局面が訪れます。だが、それがどのように進んでいるのか日本、とりわけ高知にいた私には当時知るすべがありませんでした。

アメリカ留学と黒人文学の新たな展開の発見

しかし幸運なことに私は1979年の秋から翌年の3月まで高知女子大学での組合運動の成果として生まれた海外留学制度のおかげで初めてアメリカを訪れ、一カ月間にわたり全米をグレイハウンドで回り、大きな都市のブラック・ブックストアで本を買いあさり、各地で黒人の人々や学者に話を聞き、U.C. Berkeleyに落ち着いてからはブラック・スタディーズの授業にも参加しつつ、買いためた本を読みあさることができました。その結果、次のようなことがわかってきたのです。

黒人女性作家の進出

一言でいえば公民権運動の時代を体験した世代の間から、それまでとは異なった伸びやかで共同の変革のエネルギーに満ちた文学が1970年代に入り、続々と生まれてきつつあるという実感でした。とりわけその担い手のほとんどがそれまで沈黙を強いられてきた黒人女性たちであったのです。そして彼女らは公民権運動の時代をはさんで現代を生きる黒人女性の物語を語るにとどまらず、それまで歴史に埋もれていた奴隷制を生きた女性の人生に光をあて、かつ過去の先駆的黒人女性作家の掘り起こしに取りかかっていたことがわかってきたのです。

また、こうした黒人女性作家たちの動向は、それまで声を上げられなかった黒人以外のマイナリティー・グループ、たとえば日系、中国系等の女性作家たちをも励まし、マイナリティーの文学が生まれてきつつあることもわかってきました。またアメリカの大学でのブラック・スタディーズの成果に触れ、学ぶという経験も貴重なものでした。

もう一点重要なのは、黒人女性作家たちは1960年代中盤以降の黒人民族主義やそれを背景とするブラック・アーツ運動の方向には概して批判的であったということです。彼女たちの多くがキング牧師の人種統合の理念と非暴力直接運動の理念を受け継ぎ、黒人民族主義的偏狭さ（白人排除、黒人像についての狭い理解（＝エッセンシャルイズムの黒人観）や暴力の使用から自由であったのです。また、ブラック・パワー以降のブラック・ナショナリズム的黒人運動は

内部的には伝統的な男性による女性への支配を無批判的に温存していました。黒人女性たちは、公民権運動へ参加するなかでも、黒人女性を運動の指導的な立場から排除し、男にしたがう女性としての位置をあてがおうとする黒人男性の傾向を絶えず批判してきました。

「黒人研究会」の新たな展開（第二期）と日本の社会状況

話を私の「会」へのかかわりに戻すと、そうしたアメリカ留学の後、すでに述べたように私は1982年4月より立命館大学に赴任し、毎月の「会」の例会に参加しアメリカで学んだことの成果を「会」のメンバーと交流することができるようになりました。振り返って見れば、1980年代は日本でもフェミニズムが社会運動として新鮮に受け止められ、会員のなかでもアフリカでの世界のフェミニストの大会に参加し、大いに元気をもらって帰ってきた人たちが周りに出てくる時代でした。そして女性の職場進出をうながす「雇用機会均等法」が国会を通過することになります。そうした時代の変化のなかでアメリカの黒人女性作家の動向が日本の出版業界においても注目され、アメリカ黒人女性作家翻訳選集（朝日出版）や、個々の研究者の論文や著作も発表され始めます。そうした新たな状況にも励まされ、黒人女性作家の研究が1980年代の「会」の大きな原動力となります。それだけではありません。日系移民による文学も新たに注目をあび、「会」の内部で研究・発表活動が始まり、やがて独立し一つの研究会を発足させることとなります。日系文学の研究会を新たに立ち上げたのが黒人を研究していた研究者であったのです。

ともあれ1980年代は私の専門的観点からして日本の黒人研究が新たな時代を迎えた時代という実感を持っています。それをかりに第二期と呼ぶとします。

「黒人研究会」の第三期

第三期と私が位置付ける時代は1990年代の初頭から始まります。それは第一に、アメリカでの黒人作家の位置に変化が起きた時代です。私は、1992年から3年にかけてアメリカのハーバード大学に客員研究員として滞在し、W.E.B Du Bois 研究所での毎週の研究会に参加していたのですが、ある日、隣のMITで黒人女性作家 Toni Morrison の講演会があることを知り行ったのです。すると大きな会場はすでに満杯で私は第二会場のテレビでその講演を聞いたのですが、何より今記憶に残っているのは、MITではMorrisonの代表作で、奴隷制度の時代を生き抜いた黒人女性の物語を新入生の必読文献としクラスで討議したという主催者の説明でした。そのことに私はアメリカという国の大きな変化を見ました。

第二に、アメリカ黒人文学研究、とりわけ黒人女性作家研究がやっと日本の「アメリカ文学」8（578）

会」で認知されたことです。その象徴的な出来事は1993年秋、トニ・モリスンのノーベル文学賞の受賞からまもなく行われた「アメリカ文学会」の全国大会のことでした。私と風呂本先生はトニ・モリスンや他の黒人女性作家の分科会の司会をおおせつかっていたのだが、いざ発表が始まる時間になると部屋が参加者で溢れそうになったのです。そのようなことはそれまでの黒人作家の分科会ではまったくありえなかったことで、ノーベル賞の威力を肌で感じたものでした。昔、アメリカ文学会でJames Baldwinの*Another Country*について発表の申し入れをしたとき、選考委員の先生の一人が「あんな汚らしい文学について発表するなんて」という趣旨の発言をされたと聞いたときのことを思い出し「日本の学会もやっ」という感慨を持ったのです。それ以来、モリスン研究を始めとして黒人女性作家が日本の英文科で堂々と研究の対象として認知されるようになりました。

第三に、カリブ文学が新たに登場してきたのです。かつてアフリカ人の奴隷労働を基礎に砂糖の生産で大きな富をイギリスにもたらしたバルバドスを始めとするカリブの島々からアメリカへ移民としてやってきた人々の系譜はHarold Cruseによれば20世紀初頭にまで遡ります。そしてカリブに原点を持つ文学がアメリカの黒人文学の文脈において初めて登場するのは、両親にカリブからの移民をもつPaule Marshallのニューヨークのバルバドスからの移民の社会を描いた作品や奴隷制度の負の遺産が未だに残るバルバドスを舞台にした幾つかの作品でしょう。それらはすでに公民権運動の時代に発表されていました。マーシャルの作品は、アメリカ黒人文学のより多様な起源に目を向けさせることとなったのですが、カリブからのアメリカへの移民の増大とともに移民世代のなかから新たな文学潮流が生まれ（Jamaica KincaidやEdwidge Danticat）、カリブそのものへの関心を呼び起こしました。1990年代の初頭の時期はモリスンの受賞と並行し、そのようなカリブ移民の女性による文学がアメリカの文壇でも脚光を浴び始めた時代だったのです。そうした動向を受けて「会」のなかでも私を含め、カリブ文学とその歴史を新たに掘り起こそうとする傾向が生まれ、そこから研究や翻訳が生まれてきて現在につながっています。

第四に、黒人研究者間の世界的な交流の飛躍的拡大＝グローバル化です。「会」としてのヨーロッパでの黒人文学研究会（CAR）とのつながりが生まれ、またカリブでの国際学会への参加をきっかけとして台湾をはじめアジアの黒人文学研究者との関係も生まれています。もちろんアメリカの作家や研究者を「会」の大会や例会に招待し、研究交流するという傾向も1990年代には通常化しました。

第四期と私が個人的に位置付けている時期は1990年代の終わりに訪れます。それはイギリスにおけるブラックの文学の系譜への関心です。それはカリブ文学の研究のロジカルな展開でした。イギリスはカリブ地域の島々を植民地化した歴史を持っていますが、第二次大戦後、戦後復興のためにカリブからの移民にパスポートを発行して積極的に迎え入れたのです。また同

時期に留学生として、あるいは移民の一員としてカリブの作家たちもイギリスで活動することになります。1950年代には100冊を超える文学が彼らによってイギリスで出版され、BBCの「カリブの声」という放送も定期的に流れ始め、カリブ作家たちの作品もそこで朗読されます。それは移民の第一世代の文学です。

カリブとその文学を読むうち、そのようなカリブと宗主国としてのイギリスの歴史的関係が浮かび上がり、次には、アメリカの黒人文学とは違った意味でのブラックの文学がイギリスにおいて第二次大戦後から現代にかけて展開してきていることがわかってきたのです。しかも、これは単なる文学の運動ではなく、また黒人だけの運動でもなく、もっと大きなインド・パキスタンからの移民も含めた「おれたちもまたイギリス人だ」という立場からのイギリスでの本当の意味での市民権を獲得するための運動の一環だったのです。

この運動は、従来からの「白人の国」というイギリスの自己定義を掘り崩し、「多人種・多民族からなる国としてのイギリス」への転換を求める性格のものでした。そしてその先頭に立ったのがカリブ移民の第二世代でした。彼らの両親はもともとカリブで英語を喋り、キリスト教のもとで育ち、学校ではイギリスの歴史や文学を学び、イギリスの大学への留学生試験にパスすることを数少ない成功のチャンスととらえていました。そしてその子供たちの世代は、イギリスで生まれ、イギリスで教育をうけながらも、両親の世代を苦しめたイギリス国民のなかに根深く残る差別意識に直面します。1958年にはロンドンのノッティングヒルで白人の若者による人種暴動が起こり、やがてそれがエノック・パウエルという保守党の政治家の演説に端を発した移民排斥運動へとつながり、移民規制法が次々と出され、警察から黒人の若者への差別意識を背景したSUSと呼ばれた不当な取りしまりが続きます。こうした状況に怒りを感じたカリブの第二世代の若者たちは、反撃に立ち上がります。

そしてその差別反対の運動に立ち上がったのは、彼らだけではありませんでした。イギリス人は、もともとインドを植民地化する以前からインドの自分たちの居留地を「ホワイト・タウン」と呼び、「インド人の居住地」をブラック・タウンと呼んでいたのです。つまり奴隷貿易でカリブや北アメリカにアフリカ人を送りこんだのもイギリス人であったし、インドを植民地化したのもイギリス人であり、イギリス人は有色人種を皆ブラックと呼び、支配したのです。それをとってW.E.B Du Boisは「二十世紀の最大の問題は、カラー・ラインの問題だ」という有名な言葉を残しました。

そしてこの時期、闘いに立ち上がったアフリカ系のカリブ移民もインド系、パキスタン系の移民も、共に自分たちを「ブラック」と呼び連携の方向を取ります。そしてそれが1980年代における二度（1981年、1985年）のイギリス全土を巻き込む人種暴動として爆発します。そうしたなかで生まれたのがカリブ出身の第二世代による文学で、私はとりわけCaryl Phillipsという作家に惹かれ、研究の対象にすることになりました。

このような移民の運動は、イギリス文学という概念にも影響を与え、大英連邦の文学 (Commonwealth Literature) という概念が生まれ、英語でかかれた旧植民地国やそこからの移民の文学を包含することになり、Booker 賞といった著名な文学賞の対象に白人のイギリス人以外によって書かれた作品も含まれることとなります。インドからの移民の Salman Rushdie の *Midnight Children* が 1981 年に Booker 賞を獲得したことはそのような変化を象徴する出来事でした。日本出身のイングロがイギリス文壇で認められたの、そのような文脈において理解することができます。

実はこのような文学の分野での動向と並行し、イギリスの社会学の分野では新しい Cultural Studies が起こり、アメリカの学界にも影響を及ぼしつつあるのは知っていましたが、その指導的担い手がカリブ系の Stuart Hall や Paul Gilroy であり、彼らが学問分野において文学者たちと同じ方向をめざしていることを知ったのはもう少し後のことでした。すなわち、イギリスの左翼的学問のなかで「階級」が語られても「人種」が抜け落ちていることを Stuart Hall は早い時期に気づき、学問の内部からの批判をつきつけ始め、イギリスのブラックにまつわる論争をリードしていたのです。

カリブ文学を知るなかで新たに開けてきた地平としてのブラック・ブリティッシュの文学に私が本格的に興味を抱くことになったのは、1999 年 8 月から 2000 年 7 月にかけて客員教授としてアメリカン大学に滞在したときのことである。なかでも研究会の友人山本伸さんから教えてもらった Caryl Phillips の作品に魅かれ、ニューヨークの古本屋で絶版本を探したことを今でも覚えている。そして 2003 年にはブリティッシュ・カウンセルを通じて日本を初めて訪問した Caryl Phillips を本学に迎え講演会を開き、翌年の 2004 年には Caryl Phillips が主催したイタリアのベラージオでの国際学会にも参加し発表する機会を得た。そこには世界中からカリブ研究者や作家たちが集い、作家を囲んだ交流の輪ができ、そこで友達になった John McLeod 先生をつつとして 2009 年 4 月からの半年にわたるリーズ大学での滞在につながることになる。

第五期は、これまた我田引水と言われるのを覚悟でいえば、インド、パキスタン、アフガニスタン等の地域の英語で書かれた文学であり、1980 年代から、とりわけ過去 20 年間にわたり世界的に注目を浴びてきている文学の研究への広がりである。これはイギリスにおけるブラックによる文学への関心のさらなる展開である。

以下は私の所属する立命館大学国際関係学部のニューズレターに書いた、イギリス留学報告の中から、イギリスのブラックの文学からインド・パキスタン等の文学の関心にどのように移行していったのかを記述した部分である。

では何故インド文学という展開につながったのか？そもそもカリブ文学に手を染めたときから伏線はすでに引かれていたのかも知れない。なぜならカリブ文学にはアフリカ系作家だけで

はなく、19世紀後半からカリブに契約移民労働者としてわたって人々の末裔であるインド系の作家も含まれていたからである。その代表がノーベル賞作家 V.S. Naipaul である。Naipaul はカリブの社会の閉塞状況から抜け出したいと心底願いながらイギリスへの留学生試験に合格しオックスフォード大学で1950年代に学びその後作家として自立するのだが、皮肉なことに彼の作家としての成功はそこから逃げ出したいと願ったカリブのインド系社会を描いたことによるものであった。

私のインドへの関心はまずは Naipaul の小説に触発され、やがて様々なインドやパキスタンからの移民やその二世による文学にもすでに広がっていた。たとえば、イギリスに移民した両親の間に生まれ、自由奔放かつ多感に育つ少女の視点から描かれた Meera Syal の *Anita and Me* (1996年) は独立直後のインドとパキスタンの分離 (Partition) の際の流血の悲劇やイギリスの生活を描いていた。Monica Ali の *Brick Lane* (2003年) は、バングラデッシュで育ち、運命の神に従うという無力で受動的な女性の生き方を母親から受け入れていた女性がイギリスのロンドンのホワイト・チャペルに住む同国人の男性と結婚し移り住むうち人間として女性として花開いてゆく姿を描いたものである。現在のパキスタンから幼いときにイギリスに移り、そしてイギリスの Booker 賞を *Midnight Children* (1981年) 受賞し、イギリスでのインド系文学の存在を深く印象付け、*The Satanic Verse* (1898年) でホメイニから fatwa を出されイギリス警察の保護のもとにおかれ、世界的话题を呼んだ Salman Rushdie も問題意識に上っていた。同じく Booker 賞を受賞したインドの不可触民の男性と上位カーストの女性との恋愛の悲惨な結末を描いた Arundhati Roy の *The God of Small Things* (1997年)、David Dabydeen 等の作品をすでに日本で読んだ経験に発するものであった。

こうした間接、直接のインドへの関心を本格的にインドそのものへの関心へと導いたのはイギリスへ渡る前の夏に公用の一環として訪れたリーズ大学の英文の友人 John Mclead との研究室での会話であった。ジョンは自分が最も好きな作家として Caryl Phillips と V.S. Naipaul の作品を上げたのである。二人の作家の間の大きな違いやある意味での対立を意識していた私は率直に驚き、同時に Naipaul の作品をもっとよく読んでみる必要を感じ、昨年の訪問を機にリーズ大学の図書館から手当たり次第に彼の作品を借りてきて読み始めた。そのなかで最も面白かったのが彼の3冊の紀行文学であった。1960年代から1980年代末のインドの現実を忌憚なく描きつつ、インドの様々な人々との対話を記録したドキュメンタリーはアメリカやヨーロッパの国々とはまるで違う国の現実、歴史、文化への興味を掻き立て、イギリス滞在中にもインドを一度訪れて見ようという気になった。それはビザの関係で成らなかったが、帰国後の2月にその思いを果たすことができた。

インド文学の魅力

読んだばかりの *A Fine Balance* (1995 年)⁴⁾ のエピグラフはバルザックからのものである。

あなたはこの大いなる不幸の物語を読んだ後、きっと心おきなく夕食を楽しみ、自分がこの小説から何も感じなかったとしてもそれは作家があり得ないほど物語を誇張し、空想力を駆使したためであると感じるだろう。しかし、ご安心あれ。この悲劇はフィクションではない。みな事実なのだ。(バルザック 『ゴリオ爺さん』より)

私がこの文章を引用したのはインド文学の特徴をうまく言い表していると思うからだ。さらに言えば現在のインド文学はある意味でヨーロッパの 19 世紀文学に匹敵すると思うのである。20 世紀のモダニズム文学と文学そのものの衰退が、書くべき新たな素材の枯渇から生じた過度の文学技巧への傾斜だとすれば、インド文学がモダニズムに頼らずともリアルに現実を書いてそれ自身が面白くてたまらないほど語るべき素材に満ちているのである。恐らくその根源はインドという社会の巨大な未解決の社会矛盾にあるのだろう。そして 19 世紀のヨーロッパ文学と違うのは社会の底辺の人々も含めたその射程の深さである。そしてそのある意味での脱イデオロギー性ともいえる性格である。これは無思想という意味ではない。一定の世界観にとらわれていないという意味である。それでいて政治的であり、権力をその批判的射程に入れている。

実はそうした特徴そのものが現代の世界の特徴を反映しているのではないかということである。

私がいいたいのはインド文学が世界文学の未来を示しているとか、そういうことではなく、ある意味では世界の第三世界が語られぬまま秘めている世界を照らし出しているということではないだろうか？その意味ではアメリカの公民権運動以降の黒人女性文学が奴隷制時代の「語れざる語りえぬもの」を描いたとすれば、インドの 1990 年代の文学は「過去」の奴隷制ではなくイギリスの植民地時代から第二次大戦後の現代いまで続く世界史的近代のインド版の「語れざる語りえぬもの」を描いているともいえるのではないだろうか？ここにアメリカやイギリスの黒人文学の世界と通底するテーマが結局流れていることに気づくのである。

• • •

今日の朝、耳元から流れてくる BBC World Service をうとうとしながら聞いているとインド南部の田舎の村の不可触民カースト (Dalitz) の女性とのインタビューが流れてきてハッとせず耳を澄ました。不可触民として生まれ、それ以外の職業につくことができないなかで彼女らは人糞の処理を柄杓と桶をかついで行っておりその体や衣服には悪臭がこびりついている。政治家は選挙のたびに色々約束するが、終わるとすべて忘れてしまい、何も変わらない、

とインタビューを受けた女性は語っていた。その言葉は、ニューズレターで触れた Rohinton Mistry の *A Fine Balance* の主人公の一人の兄の物語のなかの言葉と同じであった。違うのはその兄が何も変わらないことに業を煮やしある選挙で自分の意思で投票しようとし、票の取りまとめを行う地主の手下に拷問の末殺され、それだけではなく一家が住む家も放火され家族全員が焼き殺されるというところである。かつての Jim Crow 制度のもとでのアメリカ南部の黒人へのリンチを思い出す。凄まじい勢いで近代化しつつある現代インドのなかにそのような現実が共存しているのである。

(この原稿は、2013年1月17日に行った「最終講義」に手を加えたものである)。

注

- 1) 『現代と思想』25号 青木書店 1976年9月 後に『黒人研究』56号 貫名先生追悼号(1986年)に転載。この講義は追悼号によるものである。
- 2) John W. Dower, *Embracing Defeat: Japan in the Wake of World War II*, W. W. Norton, 1999.
- 3) 「日本民主主義文化連盟」Wikipedia : <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E6%B0%91%E4%B8%BB%E4%B8%BB%E7%BE%A9%E6%96%87%E5%8C%96%E9%80%A3%E7%9B%9F>
- 4) Rohinton Mistry, *A Fine Balance*, McClelland and Stewart, 1995.

(2013年1月17日, 定年退職記念講義)